

第4領域 (公募班員)			
研究課題名	伝達物質受容体クロストークを仲介する分子機構の解明		
研究代表者名	小西 史朗	E-mail	skonishi@kph.bunri-u.ac.jp
所属・職名	徳島文理大学 香川薬学部 病態生理学講座・教授		
研究分担者名	富永 貴志・栗生 俊彦		
分担者所属	徳島文理大学 香川薬学部 病態生理学講座		
<p>これまで我々の研究グループは、小脳皮質の介在ニューロン-プルキンエ細胞間の抑制性GABA伝達が複数のシナプス機構で調節されていることを見出してきた。その一つとして、P2Yプリン受容体の活性化に伴いこのGABAシナプスは長期増強を受けることを報告した(Saitow et al., 2005a)。このシナプス機構を仲介するメッセンジャーの候補はATPあるいはADPであり、これらはグリア細胞から放出されるか他の神経伝達物質と共に放出されるものと推定される。また、この長期増強のユニークな特徴は、後シナプス機構によって誘発されることである。すなわち、ATPあるいはADPはプルキンエ細胞のGABA_A受容体感受性を増加させることによってGABAシナプスの伝達効率を長期に増強させる。これまでモノアミン(Saitow et al., 2005b)やグルタミン酸が前シナプス機構によってGABA放出を調節することは知られていたが(Rusakov et al., 2005; Satake et al., 2006)、P2Y受容体で仲介されるGABAシナプス制御は作用機構が明瞭に異なっている。そこで、P2Y受容体の活性化はどのような機序でGABAシナプス伝達を後シナプス性に増強するかをさらに検討した。</p> <p>ラット(10~14日齢)から小脳スライスを作製し、顕微鏡ステージ上の灌流槽に固定して人工脳脊髄液によって灌流した。IR-DIC法によって観察しながらプルキンエ細胞からwhole cell記録を行った。ガラス電極によって小脳介在ニューロン(バスケット細胞)を刺激してプルキンエ細胞に誘発される抑制性後シナプス電流(eIPSC)を記録した。ATP(100M)を灌流投与すると、eIPSCの振幅は長期間にわたって増大した($132 \pm 4\%$, n=6)。</p> <p>ATPのGABA_A受容体におよぼす効果を検討するため、peak-scaled non-stationary fluctuation analysis(PS-NSFA)法を用いてeIPSCの誘発に関するGABA_A受容体単一チャネル電流(<i>i</i>)と受容体数(<i>N</i>)を推定した。はじめにPS-NSFA法の妥当性を検討するため、二つのコントロール実験を行った。まず、保持膜電位を変えてGABA_A受容体チャネル開口の駆動力を変動させると単一受容体チャネル電流の大きさのみが変化し、受容体数<i>N</i>が変わらないことを確認した。次に、GABA_A受容体アンタゴニストのbicucullineによって受容体数を減らしたときに、PS-NSFA法で<i>N</i>が減少することを確認した。これらの条件下で、次にATPのGABA_A受容体機能に対する作用を調べた。ATPはGABA_A受容体単一チャネル電流<i>i</i>を顕著に増加させた($160 \pm 9.9\%$, n=6)。一方、GABA_A受容体数<i>N</i>はATP投与前後で有意に変化しなかった($94 \pm 6.1\%$)。これらの結果から、ATPはプルキンエ細胞の単一GABA_A受容体チャネル電流の大きさを増加させることによってGABAシナプス伝達の長期増強を引き起こすことが示唆された。</p> <p>ATP誘発GABAシナプス長期増強を仲介する細胞内シグナル伝達系についても検討した。その結果、ATPはP2Y₁₂型プリン受容体を活性化して細胞内cyclic AMP生成を高めprotein kinase A依存性の蛋白リン酸化反応によってGABA_A受容体チャネル機能を長期的に増強する可能性の有望なことが示された。</p> <p>また、受容体クロストークの分子基盤を明らかにするための実験系を確立してきた。脊髄神経節ニューロンの単離培養系を用いて、mGluR1グルタミン酸受容体およびTRPV1チャネルの連関を明らかにするための電気生理学的、分子生物学的実験を遂行している。</p>			